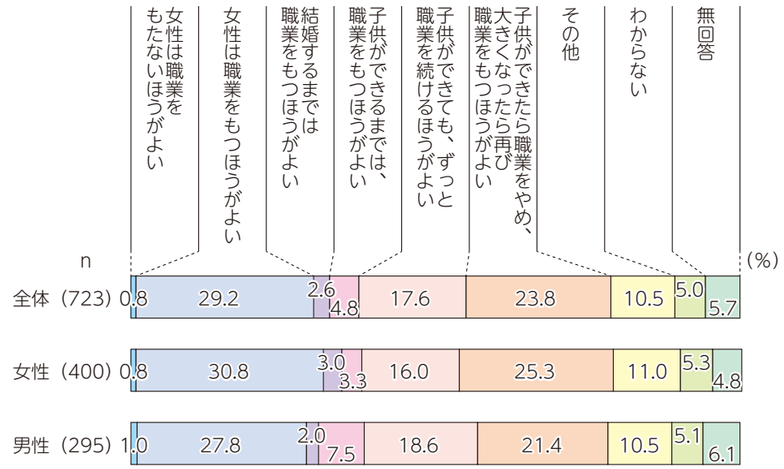
特集　女性と仕事　それぞれの生き方

～あなたにとって仕事とは何ですか～

多様なライフスタイルに合わせて、働き方も人それぞれです。女性と職業について、みなさんはどう意識していますか。今回は、台東区で働く女性にインタビューをしました。

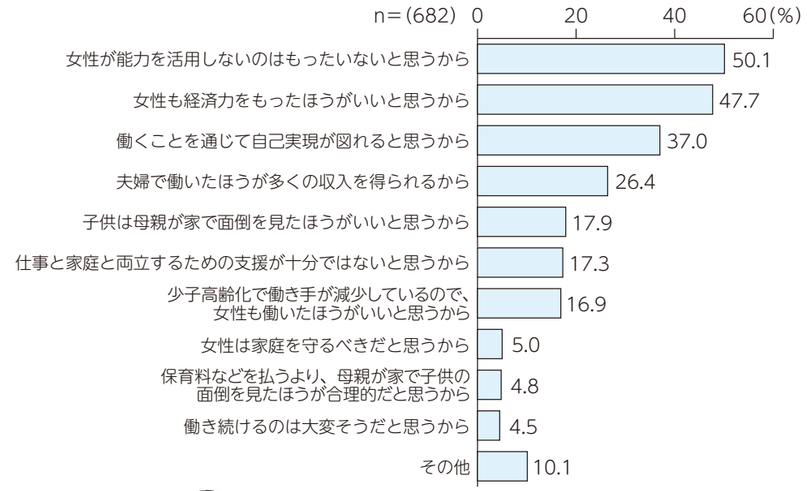
意識調査から

一般的に女性が職業をもつことについて、あなたはどうお考えですか。



「女性は職業をもつほうがよい」が約３割、次いで「子供ができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつほうがよい」が２割強。性別でみると、男性は女性よりも「子供ができるまでは、職業をもつほうがよい」で4.2ポイント高くなっています。

女性が職業をもつことについての意識に関し、そう考えた理由は何ですか。



台東区では、「台東区男女平等推進行動計画　はばたきプラン21」の改定に向けて、平成30年5月に「男女平等に関する台東区民意識調査」を実施しました。その中から一部を紹介しています。調査報告書は、「はばたき21」のほか、区政情報コーナー、区のホームページなどで閲覧できます。

●調査概要

【調査対象】
平成30年4月1日現在、台東区にお住まいの満18歳以上の方

【調査方法】
調査票の郵送配布及び郵送回収による

【回収結果】
発送数　1，800
有効回収数　723（有効回収率40・2％）

落語に女性ならではの演出を加えたい

落語家　柳亭　こみち師匠

落語の道に入る

私は、早稲田大学卒業後、社会人生活を経て２００３年２月、柳亭燕路に入門し、「生き方の舵を切るように」落語の道に入りました。入門当時、落語協会の女性落語家の先輩は６人（現在は５人）。落語界は男性社会であり、師匠・燕路に「落語は男がやるもの」と諭されましたが、熱意と覚悟は十二分にありました。

前座修業に男性と変わるものはありません。師匠の方々や周囲に常に気をつかい、寝不足やプライベートのない生活が続くのはとても大変でしたが、ふりかえると「心の勉強の時間」でした。

２００６年11月に二ツ目（前座の次の階級）に、２０１７年９月には真打に昇進しました。大師匠・小三治の「小」と師匠・燕路の「路」をあわせて「こみち」と付けていただいた名前は変わらずに昇進しました。

真打になって高座への責任が増し、二ツ目時代とは一味も二味も違う緊張感で高座をつとめさせていただいております。

仕事と結婚・出産

女性落語家が結婚し、子供を授かり、家庭生活を営むのはハードルが高いかもしれません。前座の数年間は自分の時間がないですし、真打になれば芸を磨き上げるために走りつづけなくてはなりません。

女性が母親になると子育てに追われて、自分がそれまで大切にしてきた江戸の香りや落語の登場人物らしさが私の高座で薄まってしまうのではないか、と感じたことがあります。

ですから、できる限りブランクをあけたくないと思いました。二度の出産の際はお腹の大きいのを隠して出産数日前まで高座に上がり、３週間後には復帰しました。次男の出産後は、産んだその日からベッドで落語の稽古を始めました。

二児の母として真打に昇進したのは私が落語史上初になりますが、落語家としてのキャリアを積んでいくなかで、結婚や出産を言い訳にしたくなかったのです。

私の台東区

台東区には浅草演芸ホールと鈴本演芸場（上野）の二つの寄席があり、私も出番を多くいただいています。また、落語協会の事務所が上野にあり、稲荷町うららか亭で落語教室の講師をしています。

夫は漫才師「宮田陽・昇」の昇で、夫も浅草演芸ホールや東洋館に出演させていただいております。先日、家族で花やしきに行き、ふだん高座に上がっている台東区でプライベートも過ごすことができました。台東区は特別な街です。

落語のなかの男女

落語は男性の視線で語るものが多いのですが、なかには女性が活躍する（カギを握る）噺・テーマもあります。スタンダードな古典では、「たらちね」「お菊の皿」「お見立て」「転宅」「厩火事」「締め込み」「三枚起請」……。

江戸・明治が舞台でも男尊女卑とは限りませんが、男性落語家が男性の視線で語ると、女性は脇役・相手役、ときには男性を惑わせる存在として登場します。女性落語家がそのまま演じるのは不自然と受け取る人もいます。現代に生きる私が現代のお客様の心に訴えるには工夫が必要です。既存にない「女性が息づいている場面」をこしらえることが、女性が古典落語を演じるポイントとなり得るかもしれません。「お見立て」や「三枚起請」に出てくる喜瀬川おいらんを単なる悪女ではなく人間らしさを加えて演じたり、「代書屋」「宿屋の富」「茶の湯」に従来の形になかった女性を登場させたりと、男性にはない視点をつくったりしています。

江戸・明治から語り継がれる落語に女性ならではの演出を加えることに、柳亭こみちとしての活路があるかもしれません。また、女性落語家がこれまで挑戦したことのない落語を手がけたいです。ママ落語家としてだけではなく、噺の前例もつくっていきたいのです。

まだまだ先の話ですが、「寄席にいつも出ているおばあさん」が将来の目標です。

二児のママ落語家で初の真打に昇進した　こみち師匠